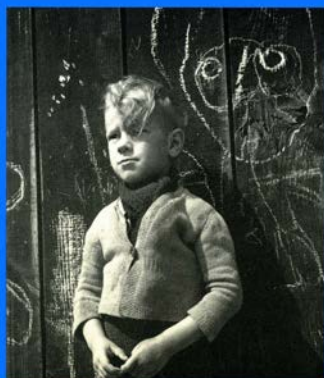


第14回交歓演奏会【1993年(平成5年)6月18日】大阪フェスティバルホール  
(同志社グリークラブ 関西学院グリークラブ)



The 14th  
Doshisha Glee Club  
Kwansei-gakuin Glee Club  
Joint Concert

Ⅰ 関西学院グリークラブ

男声合唱組曲

「木下杢太郎の詩から」

両国

こほろぎ

柑子

雪中の葬列

市場所見

作曲/多田 武彦 指揮/丸山 武彦

## 男声合唱組曲 木下杢太郎の詩から

関西学院グリークラブ

### 組曲「木下杢太郎の詩から」について

多田武彦

1951年1月、当時京大の学生だった私は、関学グリーの第18回リサイタルを聴きに行った。この日、第2部の冒頭に歌われたのが、木下杢太郎作詩・山田耕筰作曲・林雄一郎編曲による「夕やけの歌」であった。たった12行の詩であったが、日本の美しい言葉と響きが織りなす夕景を、山田耕筰は詩人の魂に寄り添うように作曲し、これをア・カペラの男声合唱に編曲した林雄一郎の筆致をなぞって行くように、学生指揮者松浦周吉と関学グリーが名演奏した。

私が清水脩先生の助言に従って、銀行に勤めながら日曜作家のつもりで40年近く合唱曲を作曲し続けて来た過程で、詩の選択を殊の外厳しくおこなって来たについては、一つには清水先生の薫陶のせいもあるが、それ以外に、古今東西の名歌曲の中で、何十年何百年経っても消えてなくなる作品を見続けて来たことにも起因する。長唄「勧進帳」や「京鹿子娘道成寺」から、日本民謡「津軽じょんがら節」においても、詩と音楽との相乗性は、終生の感動につながる。40年以上も前に聴いたこの杢太郎の詩と耕筰の曲を、私は、今でも折にふれ、エレクトーンで奏でる。

1960年、横浜国大グリーから新作の委嘱があった。ここで私も杢太郎の詩による組曲を書いてみよう、作曲にとりかかった。美しい版画を見るような4つの詩をもとに組曲が出来た。(1983年、もう1曲をつけ加え、現在の組曲とした。)

ただ一時のイベントのために歌われ、いつのまにか消えてなくなる多くの歌の中で、生き残る歌曲を書くことが如何に大変なことか、今回は改めて、杢太郎の詩群は、私にそれを教えている。

### 作詩者 木下杢太郎

明治18年(1885)8月1日、静岡県加茂郡湯川村(現、伊東市)に生まれる。本名太田正雄。二兄四姉をもち、生家は家号を「末惣」と呼ぶ、呉服雑貨商を営む旧家であった。

東京の独逸学協会学校、第一高等学校を経て、明治39年(1906)7月、東京帝国大学医科に入学。幼少の頃から文芸書に親しみ、中学時代には三宅克巳画伯について洋画を学んだ彼は、最初は美術家を志し、また大学ではドイツ文学科を志望したが、いずれも家人の反対に遭い、やむなく断念する。

しかし、詩人・木下杢太郎は医学生となったのち開花する。明治40年(1907)3月、与謝野寛主宰の新詩社に加盟、その機関誌「明星」に詩作を発表すると同時に、北原白秋、吉井勇らと親交を結ぶ。同年12月に「独立なる個性の印象に奔放なるべく、自由ならんことを欲し」て新詩社を脱退、翌年12月に白秋らと共に「パンの会」を起こした。この頃の詩作をまとめた「食後の唄」は、わが国の近代詩史の上でも重要な地位を占むべき名詩集である。

明治44年(1911)12月大学を卒業後、森鷗外のすすめで皮膚科教室に入ってから事実上文壇との縁を絶ったが、その後も折に触れて詩作は続けた。

昭和12年(1937)5月、母校東京帝国大学医学部教授となり皮膚科学講座を担当したが、終戦直後の昭和20年(1945)10月15日、胃癌のため永眠した。現在、生地伊東市の伊東公園には、彼の詩碑が建てられている。